

緑をつくり、育て、 緑に学ぶ



愛知県総合教育センター所長
佐藤 順彦 氏

平成四年一月十日、岡崎市立矢作
西小学校、平成五年十二月十六日、
岡崎市立東海中学校及び岡崎市立城
南小学校。これは当時文部省に勤務
していた私が、全日本学校環境緑化
コンクール全国審査の審査員として
岡崎市をお訪ねした日程と学校名で
ある。この時の結果は矢作西小学校
が特選、東海中学校も特選、城南小
学校は準特選であった。

五年間にわたり、全国の小・中学
校を見させていただいた私の結論
は、岡崎市の学校緑化活動は全国一
ということである。

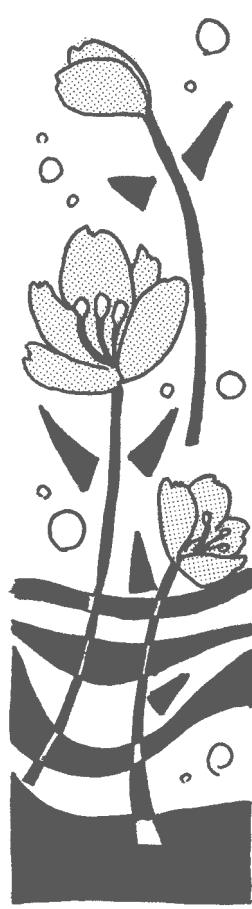
岡崎市内の小・中学校は昭和三十
六年以来、ほぼ毎年のように全国審
査で特選、あるいは準特選を獲得し
ておられ、それが現在も継続して優
れた成果をあげておられることには
驚嘆させられるばかりである。

この岡崎市の素晴らしい学校緑化
活動の資料を取り入れながら、平成
六年三月に『緑をつくり、育て、緑
に学ぶ』と題する手引き書が財団法人
人国土緑化推進機構で作られた。元
岡崎市立南中学校長、神谷四士保先
生らとともに、私も執筆をさせてい
ただいた。

岡崎市の小・中学校の緑化活動で
は、緑をつくるというハード面の活
動は当然として、育成した緑を活用

したソフト面での活動が高く評価さ
れている。各教科や特別活動等に緑
を取り入れ、創造性や課題解決能力
を育み、科学的思考能力を養い、自
ら学習する力を身につけさせるな
ど、まさに新学習指導要領を先取り
した取組が評価されてきた。

今後とも緑を一つの基軸とした教
育活動にさらに創意工夫を加えら
れ、全国一の実績を継続されるよう
期待するものである。



(x)と(○)よりひこ

教育随想



月報

岡崎の教育

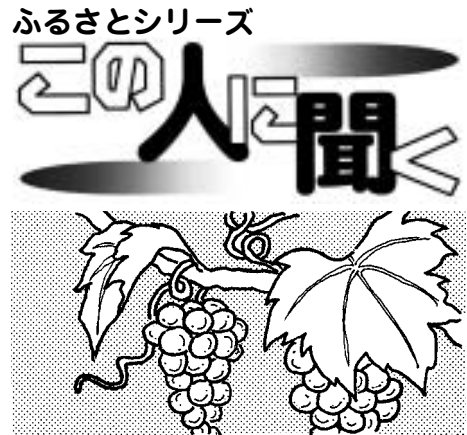
平成13年10月1日

10月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

- 教育随想 1
愛知県総合教育センター
所長 佐藤 順彦氏
- この人に聞く 2
甲村 優子氏
- 羅針盤 2
南中学校長 筒井 一夫
- ふれあい 3
愛宕小 井戸 由実
城北中 今枝 武司
- 特集 4・5
子供の科学する目を育てる
- お知らせ 6・7
- フォト・ヒストリー ... 8
マンモス校(平成3年)
- この本を 8



女性の地位を高める奉仕活動

国際ソロプチミスト岡崎

前会長 甲村 優子 氏

甲村さんが会長をされていた国際ソロプチミストは、管理職、専門職についている女性の世界的組織で、人権と女性の地位を高める奉仕活動を常に行っている団体である。

岡崎クラブが誕生して本年度で十五周年を迎えている。献血奉仕や岡崎福祉の村へのバザーの協力、高校生への奨学金や岡崎市社会福祉協議会などへの寄付を継続して行っているというのである。

クラブの誕生から関わってきている甲村さんは、これまでの活動につ



いてこうおっしゃった。

「国際的な環境問題や老人看護の問題ももちろん大切ですが、地域に密着した問題についても目を向けて活動をしてきました。特に最近では、学校での講演活動も積極的に支援しています。このごろ青少年の問題がとても気にかかります。青少年が絡む悲しい事件が多いのは、青少年に何かが欠けているのではないのでしょうか。」

わたしは、心の問題だと思いません。こうした問題は、核家族など、家庭のあり方も原因の一つだと思います。親と先生が一体となつて育てていなくてはいいけません。

特に親の責任が大きいと思えます。」

自分の娘には「人の役に立つ人間になりなさい」と言い続けたそうである。

学校での講演以外にも、点訳を熱心に行っている高校生に対して表彰を行ったり、全国から高校生が集まり諸問題を討論するフォーラムを支援したりするなど、特に青少年に向けた活動を熱心に進めている。

「とにかく学生たちが真剣に取り組んでいることを認め、それに対して真剣に支える。光の場を与える。このように私たちは少しでも手助けができたという気持ちで活動してきました。」

会長、家業、家庭の仕事と非常に多忙でありながら、「人と会うことで力を頂き、仕事を一つ一つ成し遂げていく喜びで、さらにながめられるのです。」と、さらりとと言われる目元が涼しげである。

本クラブの活動も、これから益々と活発に展開されていくことを期待したい。

氏名 甲村 優子
 生年月日 昭和十六年十二月十七日
 住所 伝馬通二丁目五番地



今こそ 情報発信を

南中学校長

筒井 一夫

今夏のお盆休みに三歳になろうとする孫がやってきた。半年ぶりに会う孫は、言うこと為すこと目を細めるばかりである。少々はめを外してもつい大目に見てしまう。そんな時、親が真剣に叱る。そんなに叱らなくてもと思うのだが、息子は言う。

「甘えてわがままな癖がついてしまうと、家に帰って直すのに一か月くらいはかかってしまう。」と。

自分の家でも他所でも、生活スタイルの基準は変えない方がよい。同様に、児童・生徒に対する姿勢は、全教職員同じでなければならぬ。特に、中学生は規範を破ることに喜びを感じる年ごろでもある。腰パン、ミニスカート、携帯電話しかりである。そういう生徒は必ず言い張る。「私だけじゃない。みんなしている。」「そう言うのは先生だけで、〇〇先

幸せが訪れる席

愛宕小 井戸 由実

「これ、何。」
「だから、今言ったでしょ。」

自己主張をすることの多い二年生の中でも、特にA男は話を聞くことが苦手である。今言ったことを数秒後には聞き返すといった有様であった。

「これ、何。」
あまりのことにしびれをさらしたわたしは、教卓のすぐ横に席を設けることにした。
「本当に、移動するの。」

今にも泣き出しそうなA男。
しかし、この席について三日後ぐらいから、
A男の態度に変化が表れ始めた。
苦手な算数の時間に、
授業前からノートを開き、繰り返し学習に取り組むようになった。
「算数、少し好きになったよ。」
算数だけでなく、国語や清掃活動



にも黙々と取り組むA男が愛らしかった。
「この席になってから、幸せが来るようになった。」
はにかみながら、A男はつぶやいた。

席替えの日。A男の成長ぶりを誉め、例の席をなくすことを伝えた。すると、どの子もあの席になりたかったのにと残念がった。

幸せが訪れる席が復活する日は、やって来るのだろうか。



A子と夢の全国大会

城北中 今枝 武司

「この子と一緒に全国へ行きたい。」
A子がソフトボール部に入部したときのわたしの感想である。そう思わせるくらい、A子には投手としてのすばらしい素質を感じた。

しかし、最後の大会を迎えるまでのA子は決して順風満帆ではなかった。冬はあかぎれで手がバリバリになった。スナップが強いため、何度も爪が割れた。そして三年生になっ

てからは、腰痛に悩まされた。一大会として、まともに投げきったことがないという状態だった。

そういう状況の中、A子は笑顔で耐え続けた。周囲からの期待と投げられない屈辱に胸を痛めていたであろうに、黙々と走り込みを続けた。A子の笑顔に何度助けられたことだろう。A子を見ているうちに「全国へ行きたい」という気持ちは、「神様はこんなに努力している子どもを見放すわけがない。全国大会で活躍ぶりを見てもらいたい」に変わっていった。

わたしにとって初めての全国大会。A子のがんばりとそれを支えた他の部員、保護者の方々の協力があったこそなしたと感謝している。

今になっても青空の下、笑顔で投げるA子の姿が目に浮かぶ。



生は言わなかった。」と。

学年始めに、全教職員で共通理解を図ったのに、担当学年でなかったり、授業や部活動で接していない場合は一歩引き下がってしまったりと、歩調が乱れる現実がある。しかし、孫の例ではないが、指導の一貫性が崩れると、その後の直しに数倍もの労力がいるのも事実である。

本校では、夏休み中に「南中寄り合いネット」という、職員と保護者との懇談会を四小学校区で開催した。親御さんの抱え込んでいる悩みや、家での生徒の生活ぶりを知ることができた一方で、学校側の真意が家庭に通じていなかったり、誤解されていた事項もあった。懇談を通して、家庭への情報不足と学校への信頼不足が根底にあるとうかがえた。

いよいよ来年度から新学習指導要領が実施される。子供を家庭や地域へ三分の一弱を委ねることを考えると、移行がスムーズにでき、その実を上げるためにも、学校と家庭や地域との意思の疎通が欠かせなくなってくる。今こそ、三者の共通理解を図るためにも、学校が今まで以上に情報提供して、啓発活動を最重要方針とする認識を持たなければならぬ。

子供の科学する 目を育てる



宙に浮く物体に驚く子供たち

子供の科学に対する興味・関心を喚起するために、地域の方や専門的な分野で活躍されている方を招いたり、公的な施設へ出かけて学習を進めたりしている学校が増えている。

「おもしろ科学教室」では、愛知教育大学の学生たちが学校を訪問して、子供たちに科学のおもしろさを学んでもらおうと、身近な材料で楽しい実験を行っている。子供たちはそれぞれ自分の好きなテーマのコーナーに行き、実験に取り組む。フェルトで作った木の下に、「まほうのしずく」を入れる。するとみるみる氷の結晶が木に付き、クリスマスツリーができる実験。洗濯糊とホウ砂水でのスライム作り。見て触れて参加できるおもしろ実験に、子供たちはわくわくどきどきの連続。科学のおもしろさを実感できる瞬間である。

岡崎市環境調査センターでは、毎年夏休みに「夏休み環境学習教室」を開催している。環境問題に関心のある子を対象に、生活排水の汚れを調べたり、空気の汚れをマツの葉などで調べたりと楽しく環境について学べる機会を持っている。また、夏休みだけでなく、この施設を利用して、環境部の職員の方が学校に向いて「環境教室」を開催したりしている。環境調査の方法を学び、進んで身の回りの水や土・空気を調べる子や身近な郷土の環境について関心を深める子が増えてきたと聞く。

また、国立研究機構では、小学校高学年を対象に先端技術や科学を学ぶ機会「おかげさき子屋教室」を毎年秋に開催している。世界最高峰の研究機関・岡崎国立共同研究機構の研究者から子供たちが直接学ぶこの機会を通して、科学や生き物にさらに興味を抱く結果となっている。



▲ 体にビリビリ静電気の威力



▲ 液体窒素マイナス196℃の世界



おかざき
寺子屋教室



▲ 生理学研究所での実験

▲ コンピューターによる分析



▲ 水質検査を体験

環境学習教室

生活排水中のCOD検査 ▶



◀ ビオトープでの
水生生物観察



理科離れ、理科嫌いが叫ばれている昨今であるが、子供たちのだれもが科学する目を持っている。地域にある実験環境が整った施設や、より専門的な知識を持った方々と接することによって、科学のおもしろさや不思議さに魅せられた子供たち。科学する心を育てるきっかけは、ダイナミックな実験に目を輝かせる体験にある。



▶ 発見と驚き
◀ 楽しい実験



おもしろ科学教室

- ・ 紫外線であそぼう
- ・ 気体の重さ
- ・ 五感チェック
- ・ 水ロケット
- ・ スライム作り
- ・ スーパーボール作り
- ・ シュワシュワサイダー
- ・ 液体窒素であそぼう
- ・ レインボーキャンドル
- ・ 風船ロケット
- ・ ラムネ菓子
- ・ 鏡作り

- ・ ほかほかカイロをつくろう
- ・ クリスマスツリー など



▲ 大きなシャボン玉

お知らせ



■教育最新情報

学校週5日制への秒読み

平成十四年度より、毎週土曜日を休みとする完全学校週5日制が一齐に実施される。この学校週5日制は、学校、家庭、地域社会での教育や生活全体で、子供たちに「生きる力」を育み、健全な成長を促すものである。土曜日や日曜日を利用して、家庭や地域社会で子供たちが生活体験や社会体験、文化・スポーツ活動などさまざまな活動や体験をすることが望まれている。今後も情報誌「O.C.キッズ」等を全家庭に配布して、子供たちが休みの日を有意義に過ごせるよう取り組むことが重要となる。

一方、教員にも地域社会の一員として教育の専門性を生かし、地域社会においてボランティアとして参加

することが期待されている。また、学校施設の開放でも、学校の果たすべき役割や地域との関わりが、より重要で密接なものとなってきている。

子供たちとの関わりから、実施初期の段階では教員がある程度中心的存在になると思われる。子供たちの健全育成、環境づくりに向けて、学校・家庭・地域の協力・連携のもと、積極的な取組をしていきたいものである。

学校週5日制の実施に対する岡崎市の理念

- ◆子供にゆとりある生活ができるようにする。
- ◆家族と一緒に活動する機会がふえるようにする。
- ◆体育的、文化的活動やボランティア体験活動の場とする。

■ハートピア岡崎だより

本所では、体験的活動を大切にしている。今までの活動を二つ紹介する。

●バーベキューの会

一学期も終わりに近い十八日に「一学期はお互いによくやったね」という気持ちをよくやめて中庭で行った。食材を用意する組、炭の火をおこす組にそれぞれ分かれて準備し、会食した。これらの活動の中で、意欲的に行動すること、友達と力を合わせることなどを体験することができた。

●サマーキャンプに挑戦

市の不登校対策協議会が主催するキャンプにハートピア岡崎から六名参加した。台風十一号の影響で三日間の予定が一日になったが、大変充実したものであった。竹内清先生から意欲と友達との二つの目標が示され、学校復帰に向けて大きな一歩になった。

二学期には、バスで市外に行く社会見学、サツマイモの収穫、焼き芋の会などを予定している。

■表彰

◆第二十六回岡崎市小中学生統計グラフコンクール

市長賞

竜海中 六年 山下 梓

竜海中 六年 杉浦 静香

竜海中 三年 荒井 俊介

竜海中 一年 荒井 浩介

竜海中 二年 高田 知佳

市議会議長賞

竜海中 五年 倉地 真衣

竜海中 二年 松井友里恵

竜海中 六年 刈田 唯可

教育委員会賞

竜美丘小 四年 木下ゆり子

城北中 一年 稲嶋 早希

一年 小山 尚子

竜海中 一年 山下恵理奈
学校賞 竜美丘小学校
岩津中学校

◆第三十一回愛知県野生生物保護実績発表大会

県知事賞 美合小学校

県教育委員会賞 東海中学校

◆FBC秋花壇設計図コンクール

県知事賞 生平小学校

六ツ美中部小学校

◆東海吹奏楽コンクール

・小編成の部 銅賞 甲山中学校

◆第四十一回愛知県合唱コンクール

金賞(同声) 六ツ美北中学校

銀賞(混声) 六ツ美北中学校

(同声) 矢作北中学校



▲統計グラフコンクール (市長賞：竜美丘小 山下 梓・杉浦静香)

少年自然の家だより

○キャンプ場だより

・「すぶちワイルドキャンプ二〇〇一」盛況

自然の家最大の主催行事をORLCの協力を得て八月三日から二泊三日で実施。

花火大会などと重なって

たにもかかわらず募集定員を上回る百七名の小中学生が参加した。参加者たちは恒例のカヌーや落ち葉スキー、キャンプファイヤー等を楽しんだ。今年は何員が作った舞錐式火起こし器を使って、二日目の二度の炊飯時に挑戦し、十五班中十二班が自分たちで起こした火で炊飯ができた。



▲舞錐式火起こし器に挑戦

また初日夜は、チェコのオストラヴァ少年少女合唱団がロッジに宿泊、夜は合同で花火を楽しむことができ、思わぬ国際交流で、思い出いっぱい二泊三日となった。

なお、火起こし器は希望の学校に貸し出し可能である。

・夏休みの利用状況

七・八月は、ボーイスカウトや子供会等を中心に、昨年を上回る二十四団体千五百名余の利用があった。今年も第一キャンプ場管理小屋の完成もあって、土・日曜は三団体が利用するという盛況だった。

また、親子を対象にした河川環境の学習会が二団体、市の「おいでん施設巡り」が四回訪れるなど、いつもとは違った利用が目立った。

二期は、中学校二校、小学校二十二校が入所。十一月二日の矢作北小学校で本年度の学校利用が終了する。

○自然の家の主催行事

・ファミリーウォークデー

十月二十七日(土)、自然の家周辺の自然と史跡を巡る

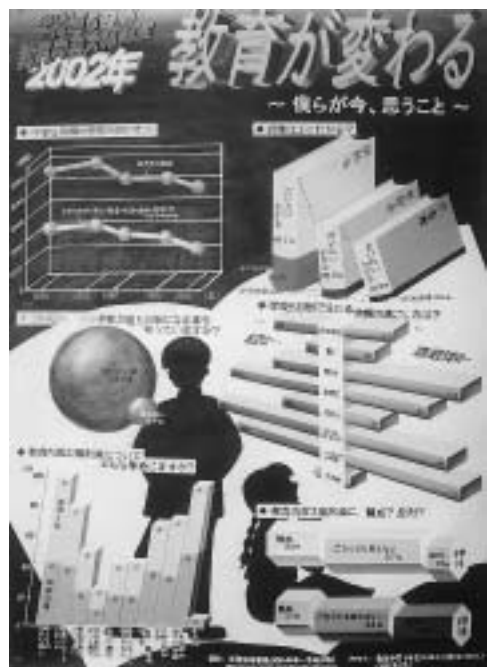
「ファミリーウォーク」を実施する。岩戸伝説の大岩、須渕の秘滝、幻の村落黍生の里などを回ってゴールで落ち葉スキーを楽しむ。この行事は、全国少年自然の家協議会の呼びかけで昨年から全国一斉に実施しており、当所も今年から参加する。小中学生とその家族対象だが、一般の参加も可能。参加費は無料。

○すぶちの自然紹介

自然の家の敷地を地元では「やんでら」と呼んでいて、昔はきのこの産地だった。今でも、西境界道の雑木林でスドウシやサクラシメジなどが採取できる。ただ、毒きのこの見分け方は難しいので、学校の活動に取り入れるのは、慎重を期してほしい。



▲スドウシ



▲統計グラフコンクール (市長賞：竜海中 荒井俊介・荒井浩介)

◆第二十三回東海中学校総合

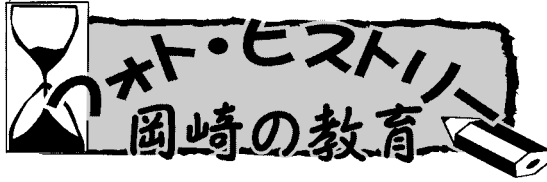
体育大会

- ・相撲団体 美川中学校
- ・相撲個人 三位 竜海中 柳 翔太
- ・陸上(個人) 二位 新香山中 千代島紫那
- ・一年女子二〇〇M 二位 男子走り高跳び

◆平成十三年全国中学校総合体育大会

- ・相撲個人 (県大会優勝 全国大会出場) 三位 矢作中 福代 直希
- ・バレエボール男子 三位 甲山中 河内 洋平
- ・水泳(個人) 五位 矢作北中 男子
- ・四〇〇Mリレー 三年 矢作北中 柴田 洋平
- ・一〇〇M背泳ぎ 準優勝 矢作中 佐々木 学
- ・二〇〇M背泳ぎ 二位 矢作中 男子
- ・一〇〇M背泳ぎ 三位 矢作中 佐々木 学
- ・四〇〇Mメドレーリレー 三位 竜海中 男子
- ・二〇〇M自由形 三位 竜海中 男子

・カ
ツ
ト
広幡小
山田
ゆかり



マンモス校 (平成3年)



平成四年、六ツ美中学校は二つの中学校に分離した。当時全校生徒千五百名を超える、県下でも有数のマンモス校でその解消を目的としていた。運動場狭しといっぱいに広がったこの写真は、最後の大運動会での全校生徒による準備体操の展望である。マンモス校解消のため、昭和五十年に緑丘小学校が増設されたのを皮切りに、矢継ぎ早に小中学校が増設された。平成九年六ツ美西部小学校が誕生し、岡崎市立の小学校は四十二校、中学校は十八校となった。

写真提供
六ツ美中学校

この本を

- *そこが知りたい！
ニュースのおもしろ真相 池上 彰
講談社 ¥1300
- *愛があるなら叱りなさい 井村 雅代
幻冬舎 ¥1400
- *人生は100回でもやり直しがきく
アレクサンドラ・ストッダード
PHP研究所 ¥1450
- *あらゆる場所に花束が… 中原 昌也
新潮社 ¥1300

***女は女が強くなる**
井村 雅代・宇津木妙子・五明みさ子
草思社 ¥1400
先の福岡での世界水泳選手権で、史上初の日本人金メダリストになった立花美哉、武田美保の、パントマイムの演技は記憶に新しい。
このシンクロを始め、ソフトボール、新体操の各競技で女子選手を世界レベルにまで鍛え育て上げた、三人の女性指導者にインタビューしている。
選手に対する愛情のかけ方の大きさ、競技に対する恐ろしいばかりのプロ意識が、語り口調を通してびんびん伝わってくる。特に選手の短所に対する見方が味わい深い。

「親」になる資質。児童虐待の記事が新聞に載るたびにそれを考える。来年度からの学校週5日制によって、より親と子供の関わりが重要になってくる。学校も、家庭での子供の様子を知るために、これまで以上にアンテナを高くする必要が生じてくる。

食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、そろそろお馴染みのフレーズが聞かれる季節になった。

秋風がさわやかで過ごしやすいこの季節。今年は何の秋にしようか思索しつつ、意気込みだけで終わらないようにと心に誓う。

シオ スア

「アンカーは任せてくれ。きつとトップで帰ってくるよ。」
体育大会で、水を得た魚のように生き生きする生徒たち。それぞれの個性を發揮する行事が目白押し。この二期、子供たちの目が、さらに輝いていくことを願ってやまない。

スライム作りやスーパーボール作り、どの子も目を輝かせて科学実験に取り組む。理科学習のおもしろさは、自然や事物に触れ、実体験できるところである。「わくわく」「どきどき」「おや」。そんな体験が子供たちの科学する目を育てていることは確かである。